様式 C-7-2

自己評価報告書

平成 22 年 5 月 1 日現在

研究種目：基盤研究（B）
研究期間：2007～2010
課題番号：１９３３０１２４
研究課題名（和文）　語圏によるＮＰＯ、ＮＧＯ国際ネットワークの研究――言政学を目指して

研究課題名（英文）　A Research Project on the Networking of International NGOs Divided by Language: Towards a "LINGUAPOLITICS"

研究代表者
出口　正之（DEGUCHI　MASAYUKI）
国立民族学博物館・文化資源研究センター・教授
研究者番号：９　０２７２７９９

研究代表者の専門分野：ＮＰＯ論
科研費の分科・細目：社会学・社会学
キーワード：(1)言政学 、(2)言政学的言語価、 (3)NPO、(4)NGO、(5)グローバリゼーション、(6)Linguapolitics、(7)Linguapolitical valence

１．研究計画の概要

人々の「生活空間」が、地理的な制約に極度に依然していた前世紀までと異なり、近年は、インターネットの世界的な発展によって、NGO（非政府組織）等による国境を越えた連携が「日常的に」かつ容易に行われるようになった。また、その影響もきわめて大きくなってきている。また、ブログなどの新たなネット情報の公共圏が誕生し、急激な拡大を見せ、従来、マスメディアが果たしてきた世論構築の役割に対して、これらの動きも、学問的な意味を考察する必要が出てきた。

「言政学」（Linguapolitics）とは、研究代表者が世界に先駆けて提唱したものであり、地政学の地理的な「生活空間」に代わる「言語空間」の社会科学的意味を考えるための体系を目指すものである。実際に、最近の NGO（非政府組織。本申請書では非営利団体ＮＰＯと区別しないで使用する）等の連携にとって、国境の持つ意味は極めて薄くなってきており、グローバルな連携が強まっている。しかし、その実態がどのようなものであるかは、なかなか明らかにされていない。本研究は、インターネット時代の連携が、「言語」という基本的な媒介手段で行われることに着目し、そのことに伴う団体等の連携や分断の影響を探るものである。なお、言政学の定義は、研究代表者によって＜複数の「言語」が使用可能な状況の中で、１つ又は複数の「言語」を取引言語として選択する前後に生じる、社会的な影響を考察する学際的科学＞である、としている。

２．研究の進捗状況

第一次言政学に関して、使用言語の選択は政治的選択であり、資金源を国内だけでなく海外のファンダーにももとめる国際 NGO の場合、活動地域、NGO の本拠地、ファンダーのいる地域などが異なりしばしば複数の言語を使うことを余儀なくされる。世界言語として流通している英語の場合、さまざまなコンテクストにおいてその重要性が変わってくることが確認された。たとえば中国語（北京語）を公用語とする東アジアの中国、香港の国際 NGO においては英語が海外のファンダーとの間のネットワーキングには欠かせない。メールなどでも英語は使用されることが多いが、活動地域間の NGO 支所や現場とのやり取りでは急速に地域言語である広東語などの地位が低下し、かわって北京語が実際の活動地域間の取引言語となってきている。

第二次言政学については、特に大きな進展があった。米国の国際点字研究センター、日本点字図書館を訪問、英語と日本語の標準化問題に関する最新の状況の把握に努めた。廣瀬は３月に米国に出張し、主として、博物館・美術館における展示の言政学的調査を実施するとともに、英語の「点字から墨字」に転換するソフトウエアの研究状況を調査した。国際シンポジウム「点字力の可能性――２１世紀の新たなルイ・ブライユ像を求めて」（於国立民族学博物館）を開催。そこで言語の受

容器官から、聴覚言語、視覚言語、触覚言語に分け、点字の触覚言語としての特性を明らかにした。また、このことから、盲聾者の使用する、「触点字」「触手話」の「字」と「話」の区別が無意味であることを明らかにした。

理論面では、言政学的ネットワークを可視化する科学的な手法について、研究を継続している。その際、「言語価」（Linguapolitical Valence）を①組織ベースで定義する場合、②個人ベースで定義する場合の科学的な厳密性について、自然科学者とも議論を行った。

３．現在までの達成度

①当初の計画以上に進展している。

（理由）

研究は、計画通りに順調に進捗している。とりわけ、概念についての研究については計画以上に大きな進展が見られた。

また、「言政学」については膨大な研究が存在する「言語」について深い入りしない計画であったら、「言政学的言語価」という概念を作り出したことによって、音声と文字については、中立的に扱わざるを得なくなった。その上で第二次言政学を考察していくと、触手話と触点字の本質的な違いがないこと、人間の能力の可能性から、「言語」を受容する器官は「聴覚」だけでないことなどが明らかになった。

４．今後の研究の推進方策

研究代表者の立場が変化したために、研究推進体制として研究協力者を新規に３名追加し、最終年の取りまとめに傾注する。また、将来的に自然科学者との共同研究を視野に入れた展開を行う。

国際的な出版社、たとえば Springer 社などからの研究成果の出版を計画。国際的なプロジェクトへの礎を作る予定である。

５．　代表的な研究成果

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１２　件）

①出口正之「日本の言語の開国―言政学的視点から」 21 世紀フォーラム　NO.109・110 合併号、pp194-205、2008。

②廣瀬浩二郎「フィーリングワーク入門――感覚の多様性を呼び覚まそう」『世界思想』37 号、世界思想社pp１～４、2010。

〔学会発表〕（計　１８　件）

①Masayuki Deguchi “Visualization of international networking of NGOs from the point of linguapolitics”, ISTR（International Society for Third Sector Research） 2007 年 10 月 17 日 フィリピン大学。

②Masayuki Deguchi “Fundamental reforms on Nonprofit organizations in Japan as an example from the international point of lingua-politics”, ISTR (International Society for Third Sector Research)2008 年 7 月 12 日 バルセロナ大学（スペイン）。

③Yuko Nishimura “Reconstruction of Minority Identities in 21st Century Japan” ISTR(International Society for Third Sector Research) 2008 年 7 月 11 日 バルセロナ大学（スペイン）。

〔図書〕（計　３　件）

①Masayuki Deguchi, GOVIND P. DHAKAL, TEK NATH DHAKAL ed. Aggreplanning″Conflicts and/or Social Harmony:Does Nonprofit Sector Matter?″ 2008, 305 ページ。

②廣瀬浩二郎『さわる文化への招待』世界思想社、2009、197 ページ。

〔その他〕

国立民族学博物館ホームページ
http://www.minpaku.ac.jp/research/sr/19330124.html